母子相互作用に伴う母親の母性・女性性獲得の過程に関する研究

利　島　　保（広島大学心理学科）

本研究のめざすことは，妊娠，出産，育児の過程にあって，母親となる女性がどのような自己形成の発達段階をたどり，母親としての意識を確立していくのか，また，その結果が出産後の母子相互作用のあり方にどのような影響をもたらし，子どもの心理的発達にどのような効果をもたらすのかという点について，出生前心理学の生態学的アプローチによって検討することである。そこで，過去３年間にわたり以下の研究テーマで３つの研究を遂行した。

1）昭和５５年度研究「母親の乳児との相互作用が，乳児の社会性及び知的発達に及ぼす効果について」において，母親のパーソナリティ，子どもとの相互作用のあり方に関する質問紙調査と乳児の知的，社会的発達テストの関係について，２７２名の1歳半児とその母親を対象に検討した。その結果，(1)母親の子どもへの働きかけが，言語的なものより行動的であるほど，社会性の発達が促進される。(2)子どもの知的発達は，母親が子どと一緒にすごす時の彼女の気分の安定度が大きく影響する。(3)内向的で受容的な母親ほど，子どもへの働きかけが動作的で，子どもと一緒にいる時に気分が落着く傾向がみられた。以上の点から，母親の子どもへの働きかけは，母親のパーソナリティや妊娠後徐々に形成されてきたであろう子どもの受け入れ態度と力動的関係をもつことが予見された。

2）昭和５６年度「妊婦の母性意識の変容過程に関する研究」では，５５年度の研究結果に基づき，妊娠から出産に至る時間的経過の中での母性意識形成の発達過程について，初産婦群と経産婦群の差異を検討しながら，妊婦の妊娠・出産に伴う環境移行という観点から母子相互作用をとらえ，母性意識形成過程における心理的危機段階について明らかにする。妊婦の環境移行に関する縦断的調査の結果，(1)母性意識の変化の契機となる事象は，妊娠初期の対人的事象から，社会・文化的事象から，生まれる子どもにかかわる事象と質的変化を示し，出産後は妊娠期の諸事象を回顧，再確認する形で環境事象を心理的なものとして内に取り込む。(2)妊娠初期の混とんとした母性意識は，時間を経るとともに環境と自己の相互作用による心理的危機の時期を数度迎えながら，成熟していく。しかし，妊娠期は短期間であるため，十分な母性の成熟をとげずに「見切り発車的母子関係が生じやすく，出生後の子どもの受け入れ方に悪影響を及ぼしやすい。(3)特に，初産婦の母性意識の成長は，彼女の情緒的な面で障害をおこしやすく，「見切り発車」的母子関係状況を作りやすい。という３つの点に要約される結論を得た。

3）昭和５７年度研究「生後１４週時期の母子相互作用のトポグラフに関する研究」において，出産後の母子相互作用を行動的状態から把握でき，そのパターンの構造から，母子関係を診断できる方法について検討した。すなわち，母子行動のビデオ観察の結果をマイクロコンピュータに入力し，解析する方法を用いて，母子行動の時系列的相互性が，どのような行動次元にみられ，そのサイクル性がどのような構造であるかという生態学的アプローチ（トポグラフ）を検討した。その結果によると，(1)母子行動には時系列的相互性のサイクルの認められる行動カテゴリー対があり，そのサイクルは，母子の一方の働きかけから＋－2.5秒のサイクルを示すことが，コンピュータグラフィクスにより読みとれた。(2)母子相互作用の行動的パターンとしては，同時共起型，一方向型，サイクル型の３種があり，特に，サイクル型を示す母子行動カテゴリーは，母子関係の心理的状態の程度を診断する手掛りを有している。以上の点が明らかになった。

以上３研究を総括すると，(1)母相互作用は妊娠期の胎児と妊婦の関係だけでなく，妊娠，出産，育児の過程にまつわる母親の心理的環境移行とし

てとらえる必要がある。(2)母性意識の形成過程には，いくつかの心理的危機を伴う発達段階があり，その各段階での危機の克服が不十分であると，成熟した母性は生たないし，子どもの受け入れに影響がある。(3)生後の母子相互作用は，初期には視覚的コミュニケーションにより枠づけられ，その中でサイクル性のある母子行動が，母子関係の指標として生じてくる。(4)一歳半くらいまでは，母親の行動的働きかけが子どもの知的，社会的成長に影響をもたらす。以上4点が検討され明らかになった。

今後，このような基礎研究から，出生前，出生後の母子の行動的，神経生理的測度をマイクロコンピュータでリアルタイムに処理し母子関係を診断する基準の実用化，出生前の妊婦の心理的危機に対するマターナル・カウンセリングについての基準の精密化が計られる可能性を予見できる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

本研究のめざすことは,妊娠,出産,育児の過程にあって,母親となる女性がどのような自己形成の発達段階をたどり,母親としての意識を確立していくのか,また,その結果が出産後の母子相互作用のあり方にどのような影響をもたらし,子どもの心理的発達にどのような効果をもたらすのかという点について,出生前心理学の生態学的アプローチによって検討することである。そこで,過去3年間にわたり以下の研究テーマで3つの研究を遂行した。